

えほんたいこうき

絵本太功記

〔解説〕

寛政十一年（一七九九）大坂豊竹座初演。近松柳・近松湖水軒・近松千葉軒の合作による全十三段の時代物です。豊臣秀吉の出世物語であるいくつかの「太閤記」を下敷きに、明智光秀が主君織田信長を討った本能寺の変から、光秀が秀吉に討たれるまでの十三日を十三段にあてはめて描いています。中でも十段目「尼ヶ崎の段」は俗に「太十（たいじゅう）」と呼ばれこの作品を代表する名場面となっています。登場人物の名称は仮名手本忠臣蔵同様、幕府の検閲から逃れるために変えて書かれています。

〔あらすじ〕

主君尾田春長（織田信長）の横暴な振る舞いを諫めたことにより、領地没収となった武智光秀（明智光秀）は、本能寺に夜襲をかけ春永を討ちます。備中高松城を攻めていた春長家臣真柴久吉は取って帰して光秀討伐となります。

〈二条城配膳の段〉 勅使を迎える饗応役を武智光秀と森の蘭丸が命じられました。光秀の息子・十次郎が膳を運んで来ると、蘭丸は言いがかりをつけます。尾田春長は光秀に誤りがあるとし、蘭丸に光秀の面を打と命じます。鉄扇で打たれた光秀は春長を諫めます。春長は怒り、光秀親子を追い出します。

〈妙心寺の段〉 光秀の母さつきは、主君を討った光秀に立腹しており、家臣の四王天田島頭や光秀の妻操の願いも入れず、一人尼ヶ崎に転居してしまいます。光秀は母の心を感じ自刃しようと思いますが、四王天と息子十次郎に諫められ、改めて天下取りの戦へと向かいます。

尼ヶ崎のさつきの閑居へ、光秀の妻操と息子十次郎の許婚初菊が訪ねてきます。そこへ旅の僧に身をやつた久吉が一夜の宿を乞うのです。出陣の挨拶に訪れた十次郎は初菊と祝言をあげ戦場へ向かいます。

〈尼ヶ崎の段〉 最前から様子をうかがっていた光秀が現れ、旅の僧を真柴久吉と見破り襖越しに刺しますが、そこにいたのは母さつきでした。敗戦の様子を告げに戻ってきた十次郎は深傷に息を引き取り、光秀と久吉は他日の決戦を誓って別れるのです。

※演者・時間等の都合により抜き差しがあります。

二条城配膳の段

さてその後、天正十年六月上旬のことかとよ。

内大臣平の春長、東北に猛威を振るひ、押して都に上落ある。御嫡男城之助春忠、二条の御所に居をし

じようのすけはるただ

め給ひ、天奏御沓を入れ給へば、饗応の役人は武智

ひゆうがのかみ

日向守光秀、森の蘭丸はじめとし譜代の良臣古老の

諸士、列を正して相詰める。院の御所の内勅、浪花中

納言兼冬仰せ出ださるゝは

いんじ

「往時応仁の乱れより、諸国の逆賊王威を軽んじ、

都の内へ軍馬を引き入れ、玉座近く馬蹄に穢し、叡

けが

慮穏やかならざりしに、幸ひ春長大志を抱き、帝都

を無事に治むる条、主上叡感浅からず。その功を賞

じ給ひ、嫡子城之助春忠を従三位に叙し、左中将に

じゆさんみ

任ぜらる院の内勅、斯くの通り」

とありければ、春長『ハッ』と平伏あり

「コハありがたき勅命。不肖の某、なんぞ一臂の力

いっぴ

に及ばん。三好を初め逆徒ばら、四方に退散いたせ

よも

しも君の聖徳。数ならぬ倅春忠身にあまつたる官位

昇進。天恩謝するに詞なし」

と、勅答あれば兼冬卿、やゝ満足の御気色、春長重ね

て

「軍務に暇なき某。心ばかりの御饗応、ひなびたる

もてなし

観世能、御上覧も時の興。イザ、奥殿へ」

とありければ、袖かき合はせ兼冬卿、武智が案内に

あない

しづくと、奥の間さして入り給ふ。春長後を見送

つて

「蘭丸これへ」

と近く召され

「汝も予て知る通り、無二の忠士と思ひのほか、心

得がたき光秀が心中。彼が心を探らん為、いつぞや寺において諸侯の見る前、恥辱を与へ恥しむれど、おもて面に怒りを顕はさず、無念を忍ぶ彼が胸中、なほもつて不審の一つ。そのまゝに差置かば、虎の子を飼ふに同じ。逆心の企てあるや、虚実を探り試し見よ」と、仰せに蘭丸

「さん候。武智がふるまひいさゝか不審に存ずる折から、割符を合はす君の御心。思ひ合はする彼が俗性、頭上に喜怒骨ある者は、主人に崇ると異人の禁しましめ。もし逆心に極まらば、討つて捨てんに手間隙いらず。奥へ踏込み引つ捕へ」

「ヤレ粗忽なり蘭丸。実否も糺たださず荒立てなば、却つて僻事ひがし出来せん。ことによそへて、ナ、合点か」

「ハ、ア、畏り奉る」

「必ず油断いたすな」

と、しめし合はして春長公、帳台深く入り給ふ。蘭丸はたゞ一人、両手を組んで思案顔、工夫を凝らす折も折、奥は、乱舞の打囃子、二番三番脇能も、終りと見えて配膳の、時刻も移る、巳の上刻、武智が一子十次郎、故実を守る饗応司、配膳のかけ盤山海の珍珠美を尽くし、目八分に捧げ来る。蘭丸見るより

「コレサ十次郎、先づ待たれよ。饗応の役目は、お手前の親父しんぶ光秀殿とこの蘭丸、兩人立ち合ひ申し合せもあるべきを、自分ひとりの取り計らひ、この蘭丸は呑み込めぬ。膳部の次第は、いかゞでござる」

「ハ、ア、お料理は板元奉行中井半左衛門、七五三の献立」

「ナニ七五三、テナア、何にもせよ、相役の某に一応の応えもなく、気儘なる致し方、近頃以つて不躰千万。この分では差しおかれず、光秀殿へ直応対、イデ

役所へ」

とかけ行く向かふ、襖ぐわらりと出で来る武智、蘭丸傍へぐつと詰め寄り

「様子残らず聞かれしな。武士は礼儀を表とするに、この蘭丸を踏みつけし仕方。いかなる趣意か云へ聞かん。返答次第手はみせぬ」

ときつば廻せば

「ム、ハ、ハ、ハ、ハ、こは仰々しや蘭丸。さすが若氣の一徹、何故貴殿を侮り申さん。最早御膳の時刻ゆるぎ、あなど役目大事と勤むる光秀」

「黙り召され。饗応の役、貴殿拙者に相勤めよとは主人の云ひ付け。主命をもどき、自分の気まゝにせらるゝは、ム、ム、ム、ム、聞こえた。こりや何か拙者を役に立たずと思し召すか、たゞしまた、智恵者と呼ばれし武智殿、人を見下す高慢か。イヤハヤ、人も知

つたる其許そのもとの素性、何が浪人の寄る辺なく、所々方々を狼狽うろたへ廻り、北国において詮方なく、糧かてに尽きた

る身の切なさ。士民共の小倅を集め、手跡指南れいちの礼物で、命をつなぐ寺子屋のお師匠様。ハ、アまだある。

いっぞや、江州佐々木征伐の折から、木下このしたと先手を争ひ、箕作みけり、和田山、時限の合戦、久吉に仕負けても、恥を恥とも思はぬ其許。なんと、さうではござらぬか」

と、心に思はぬ傍若無人、さしもの光秀くわつとせき上げ

「ヤア物に狂ふか蘭丸。大切の場所と事を慎み、云はせておけば法外千万。今一言云つて見よ、舌の根を切り下げん」

「ヲ、ならば手柄に切つて見よ」

「ヲ、切つて見せう」

「サア」

「サア」

「サア」

「サア」

「サアくくく」

と両方が、互ひに詰め寄せ詰め寄り、既にかうよと見えたるところ、襖あらはに春長飛びかゝつて光秀が、衿がみ挿んでどうと捻ぢ付け

「やをれ光秀。およそ武家の格式は、故実をもつて式法を用ゆる『過ぎたるはなほ及ばざるにしかじ』

とは古人の詞、院の内使も重けれど、皆それぐの例法あり。中納言殿饗応の膳部、金銀の瓶器を用ひ、

七宝を芥あくたの如く散りばめ、法外奔走。この後、主上

仙洞みゆきの御幸には、何を以てか饗応に叶はんや。その

上蘭丸が申すはわが詞も同然なるに、異変致す慮外

者。面打つらぶて蘭丸

「ハア」

「早く打て」

「ハア」

「打て、打てく」

「ハア、ハア、ハアくくくく」。御上ごじょう、御上、御上、御上、御上意なり」

と蘭丸が、腰の鉄扇振り上げて、眉間真つ向続け打ち、喰ひ入る要に血は滝津瀬、『これは』と駆け寄る

十次郎、膝にかためて引き敷く光秀、流るゝ血汐諸共に眼血走る無念の顔色、春長つくぐく打ち守り

「如何に光秀。今蘭丸が手をもって春長が折檻、口惜しうは思はぬか」

と、底意を探る大将の詞に、光秀居直りて

「こは仰せとも覚へず、数ならねども武智光秀、君

に捧げしわが命、骨はひしがれ身はずた／＼になる
とても、大恩あるご主人をお恨み申さんやうはなし。
さはさりながら世の人口、春長こそ鬼の再来、情を
知らぬ大将と、譏りを残し給はん事、末代までお家
の瑕瑾かさん。諸士の恨みは小車の、終に御身に報ふとい
ふ、お心の付かざるは、チエ、浅ましや悲しやなア。
御心を翻へされあつばれ仁義の大将と、呼ばれ給は
れわが君」

と、あるひは怒り、あるひは歎き、五臓を絞る血の涙
金言耳に逆立つ大将、なほも怒りの声荒らか

「ヤア云はれぬ諫言、推参至極。目通り叶はぬ、立て
失せう。ソレ、ソレ蘭丸、武智光秀親子の者門外へ引
き出ださせ。早く／＼」

と烈しき下知、『はっ』と領掌蘭丸が

「猶予はいかに」

と決め付けられ、無念重なる光秀が、わが子を引つ
立て出でて行く、底意は誰れかしら浪の、万里に羽
打つ大鵬や、面目涙十次郎、身はしよげ鳥の片羽交
ひ、父の心はしらにぎて、『神も仏もなき世か』と、
身を託ちたる忍び音の、胸はくらやみ五月闇、詮方
涙諸共に、御門の外へと

妙心寺の段

さても逆賊武智光秀、多年の恨み一戦に、春長父子を討ち奉り、妙心寺に砦を構へ、勝ちほこつたる諸軍の勢ひ、ともに威風を現はして、備へ厳しく守りゐる。

折から轟く響の音。

「光秀公のお帰り」

と、知らせのうちにこなたより、妻の操も出で迎い、待つ間ほどなく立帰る、武智十兵衛光秀。武威轟かす強将の、常にかはりし屈托顔、席を改め詞を正し「ホ、三人とも出迎ひ大儀。シテ母人には御機嫌よくお渡りなさるか」

「サイナ、先程も田島頭と自らが、わつつ口説いつ、どうやらかうやらお口が和らぎ、母公様とも睦しう」

「ム、ホそれは重畳出かいたく。さあらば直ぐさま御対面」

「イ、ヤ、それには及ばぬ、母が直々参らん」

と、声うちかけを引きかへて、木綿布子に風呂敷包み、背にちよつこり賤しずの女の姿見るより驚く人々、操は傍にすり寄つて

「系図正しき武智の御家、ことさら四海の武将とも仰がれ給ふ夫光秀。天下の御母公様ともいはるゝ御身が、浅ましきお姿はもしやお心違たがひしか」

と、尋ねににつこと打ち笑ひ

「ホ、忝くも清和源氏の嫡流たる武智の系図。元より武勇の家柄なれば、誰に恥づべきいはれなし。年は寄れども心は鉄石。渴しても盗泉の水を吞まずとは、お身たちもよう知つてゐやる筈。心穢れたわが子の傍へんし、片時も座を同じうせんはわが日本の神明へ、

恐れあり〜。伯夷叔斉を習ひたゞ雲水に従ふて出
て行く母。これがこの世の別れぞ」

と、義強き母も恩愛の涙紛らすありさまは、いとゞ
哀れぞ増さりける。光秀は黙然と、さし俯ひてゐた
りしが操の方は涙ながら

「コレ申しわが夫。母様のたゞお一人、いづくを当
てと長の旅。なぜお留めなされませぬぞ」

「ホ、不忠不孝との御さげしき、いまさら申す詫も
なく、せめては母のお心に逆らはぬが寸志の孝。四
海の内はこの光秀がたなひらひ掌てのひらにある。お留め申すな、そ
のま〜〜」

「ヲ、さすがは悪人程あつて根強い魂。チエ、いは
ん方なき人外にんがいめ」

と、睨む目元にはら〜と、涙かくして立ち出づる
心の張弓強弓つよゆみの引きぞ煩ふ嫁孫の中に悲しき初菊が

「これなう申し祖母ばば様」

と控へる手先振り払ひ、見返りもせず出でて行く『わ
つ』と泣き出す人々を制し留めて

「ヤア〜者ども。母人の御行方いづくまでも見届
けよ。御手道具の用意〜」

と光秀が、鶴のひと声あまたの軍卒、箆ながもち筒長持挟箱、
その外そと雑具ざうぐ鋌乗物

「御母公様のお姿を、見失ふな」

と足早に、後を、慕ふて急ぎ行く。影見送りて光秀
は、なにか心に打ちうなづき

「奥操、せがれ倅十次郎、嫁初菊もろとも次へ立ちやれ。
用事あらば手を鳴らす」

と、心ありげな詞の端
「アイ」

とは言へど立ち兼ねる

「ヤアぐづぐとなにを猶予。早く立てよ」

ときめつけられ心は後に残れども親子三人打ち連れ
て、是非なく、次へ入相いりあひの鐘が無常を告げ渡る、げ
にももの凄き庭の面忍おもび出でたる四王天『君の様子は
いかゞぞ』と、身をひそめてぞ窺ひある。それとは知
らぬ光秀が、あり合ふ硯引き寄せて、筆喰ひしめし
唐紙の、表になにやらさらぐぐ。かくと見るよ
り、十次郎瞬きもせず物蔭に、守りあるとも白書院、
たゞ一心に書き認め筆投げ捨てゝむんずと坐し、諸
肌くつろげ指添ゆしぞえを、抜くや玉散る氷の刃、やゝ打ち
眺め両眼に、はらく涙喰ひしばり、既にかうよと
見えければ主従小蔭を走り出で

「ヤレ、早まり給ふな父上」

と、取りつく十次郎、四王天、鏡のごとき両眼を、く
わっと見開き声震はし

「コレわが君。コリヤこなた狂気召されたの。今朝こんちよう

より始終の様子、心得がたく思ふゆゑ、万事心をつ
くる某それがし。物蔭より窺へば、出かし顔に辞世の一句、

『順逆二門なし。大道心源に徹す。五十五年の夢覺
め来たつて、一元に帰す』とはナゝゝゝゝ、なんの
癡言たわごと。君、臣を見ることが塵芥のごとくせば、臣、君
を見ること怨敵おんてきのごとしと、春長猛威に増長して、
神社仏閣を焼失し、万民の苦しむる暴悪、神明これ
を誅するに、光秀の御手をもつて討たし給ふ。天の
与ふるを取らざれば、災ひその身に帰す。さほどの
ことを申さずとも、よく御合点のこなた様、切腹と
は馬鹿ぐしい。人は知らず、この四王天田島頭、殺
すこと罷りならぬ」

と居丈高

「ヲゝさうぢやぐ。父の命はわれぐ始め万卒に

至るまで、御一身に及ぶ御命。臣義を守るとも、君こ

れを補助せざるは、それ將とは申されず。たゞ生害

はとゞまり給ひ、下万民の苦しみを救ひ給へ」

と右左、涙とともに諫めの詞光秀はたと横手を打ち

「ハ、誤つたり〜。一天の君の御為には、惜しか

らざりしこの命、暫しはながらへことを計らん。ま

づは綸旨を乞ひ受けて、なほも背かん者どもを悉く

誅戮せん。急ぎこれよりわれは参内。汝ら二人は久

吉が、都へ登るを半途に待ち受け、たゞ一戦にぼつ

返せよ。イデ装束を」

と立ち上がれば近習小姓が心得て運ぶ大紋立鳥

帽子立派に着なす骨柄はあたり輝くそのよそほひは

や引き出だす栗毛の駒光秀ゆらりと打ち乗つて

「ヤア〜十次郎。田島頭もろともに西国へ馳せ向

かひ、必ずともに油断なく軍功を現はせよ」

と、詞に『はっ』と四王天

「ハ、ハ、ハ、君、御出陣には及ばずとも、某かの

地に向かひなば、猿冠者めが素頭を、討ち取るは手

裏にあり」

「ア、イヤ〜、彼もしれ者。定めて遠き計略あら

ん」

「コハ親人の詞とも覺えず。父に代はつて某が、軍

配取つて一戦に、敵の首を実検に備へんコレ、コレ

〜〜〜気づかひあるな」

と、勇み進みしわが子の骨柄

「ホ、あつぱれ〜潔し。われも後より出陣」

と、手綱はいくりしと〜〜、乗り出す駿足馬上

の達者、轡の音は秋の野の、虫にはあらでりん〜

〜

「綸旨をやがて頭に戴き、刃向かふ奴ばら打ち立て、

追ひ立て切り散らし、追っつけ四海に羽を伸さん。

いそふれやつ」

と一散に、大内山へと急ぎ行く。

尼ヶ崎の段

月漏る片庇、こゝに苅り取る真柴垣、夕顔棚のこ

なたより、現はれ出でたる武智光秀。

「必定、久吉この家に忍びあるこそ究竟一。たゞ一討ち」

と気は張り弓、心は矢竹藪垣の、見越しの竹をひつそぎ鐘、小田の蛙の鳴く音をばとゞめて『敵に悟られじ』と、差し足抜き足窺ひ寄る。聞こゆる物音『心得たり』と、突込む手練の鐘先に、『わつ』と玉ぎる女の泣き声、『合点行かず』と引出す手負ひ、真柴にあらで真実の、母のさつきが七転八倒、

「や、ヤ、ヤ、こは母人か、しなしたり。残念至極」

とばかりにて、さすがの武智も仰天し、たゞ呆然た

るばかりなり。声聞きつけて駆け出る操、初菊もろとも走り出で、

「ノウ母様か情けない。このあり様は何事」

と縫り嘆けば、目を見開き、

「嘆くまい、嘆くまい。内大臣春長といふ、主君を害せし武智が一類。かく成り果つるは理の当然。系図正しきわが家を、逆賊非道の名に穢けがす、不孝者とも悪人とも、たとへがたなき人非人。不義の富貴は浮べる雲、主君を討つて高名顔、たとへ將軍になつたとて、野末の小屋の非人にも、劣りしとは知らざるか。主に背かず親に仕へ、仁義忠孝の通さへ立たば、もつさう飯の切り米も、百万石に優るぞや。おのれが心たゞ一つで、験しは目前これを見よ。武士の命を断つ、刃も多いこの様な、引つそぎ竹の猪突き鎧。主を殺した天罰の、報ひは親にもこのとほり」

と、鎧の穂先に手をかけて、ゑぐり苦しむ氣丈の手負ひ、妻は涙にむせ返り、

「コレ見たまへ光秀殿、軍の門出にくれぐも、お諫め申したその時に、思ひ止つて給はらば、かうした嘆きはあるまいに、知らぬ事とは言ひながら、現在母御を手にかけて、殺すといふは何事ぞいなう。せめて母御の御最期に、『善心に立帰る』と、たつた一言聞かしたべ。拝むわいの」

と手を合はし、諫めつ泣い一つ筋に、夫を思ふ恨み泣き、操の鑑曇りなき、涙に誠あらはせり。光秀は声あらまげ、

「ヤア猪口才な諫言立て、無益の舌の根動かすな。遺恨重ぬる尾田春長。もちろん三代相恩の主君でなく、わが諫めを用ひずして、神社仏閣を破却し、悪逆日々に増長すれば、武門の習ひ天下のため、討取つ

たるはわが器量。武王は殷の紂王を討ち、北条義時は帝を流し奉る。和漢ともに、無道の君を弑するは、民を休むる英傑の志。女童の知る事ならず。退^すさりをらう」

と光秀が、一心変ぜぬ勇氣の眼色、取りつく島もなかりけり。折しも聞ゆる陣太鼓、耳を貫く金鼓の響き、『あはや』と見やる表口、数ヶ所の手傷に血は滝津瀬、刀を杖よろほひく、立帰つたる武智が一人、庭先に大息つき、

「親人これにおはするや」と、言ふも苦しき断末魔、見るに驚く母親より娘は側に走り寄り、

「ノウいたはしや十次郎様。祖母様といひお前までこのあり様は情けない。お心確かに持つてたべ、やいのく」

と取り付いて、介抱如才なくばかり。光秀わざと声あらゝげ、

「ヤア不覚なり十次郎、仔細はなんと、様子はいかに。つぶさに語れ」

と呼ばれば、『はつ』と心を取直し、

「親人の指図に任せ手勢すぐつて三千余騎、浜手の方に陣所を固め、今や帰国と相待つくところに、敵はそれとも白浪の、艫^ろを押切つて陸路^{くがじ}に漕ぎ付け、追ひく都へ馳せ上る、真柴の軍勢ごさんなれと、

関^{とぎ}をつくつて味方の軍兵縦横無尽に薙立つれば、不意を打たれて敵は敗亡、うろたへ騒ぐを追立て、追詰め、こゝを先途と戦ふうち、後の方より大音声。

『真柴筑前守久吉の家臣加藤正清これにあり、逆賊武智が小わつば共、目に物見せてくれず』と、言ふより早く太刀抜きかざし、四角八面に切立てられ、ま

たゞく間に味方の軍卒、残らず討死仕り、無念ながらもたゞ一騎立帰つて候」

と、息継ぎあへず物語れば。光秀怒りの髪逆立ち「ヤアいひ甲斐なき味方の奴ばら。シテ四王天田島頭は」

「さん候四王天は、目指すは久吉一人と、昨朝より一騎駆け。乱軍なれば生死の程も、確かにそれと承はらず。親人の御身の上心にかゝり候ゆゑ、未練にも敵を切抜け、これまで落延び帰りしぞや。この所に御座あつては危し、危し。一時も早く本国へ引き取り給へ、サア／＼早く」

と、深手を屈せず父親を、氣遣ふ孫の孝行心、聞くに老母はせきかねて、

「アレ、あれを聞きや嫁女、その身の手疵は苦にもせず、極悪人の倅めを、大事に思ふ孫が孝心。ヤイ光秀、子は不便にないか、可愛いとは思はぬかやい。お

のれが心たゞ一つで、いとし可愛いの初孫を、忠と義心に健気なる討死でもさす事か。逆賊不道の名を穢し、殺すはなんの因果ぞ」

と、せぐり苦しき老いの身の声聞きつけて十次郎、「ヤア、そんなら祖母様には、御生害遊ばしたか。今生のお暇乞ひ、今一度お顔が見たけれど、もう目が見えぬ。父上、母様、初菊殿。名残り惜しや」と手を取つて、妹背の別れ愛着の、道に引かるゝいぢらしさ、母は涙に正体なく、

「討死するは武士の、習ひといへど情けない。十八年の春秋を刃の中に人となる、いつ楽しみひまの隙もなう弓矢の道に日をゆだね、今朝の門出のその時にも『母様今日の初陣に、天晴れ高名手柄して、父上や祖母様に誉めらるゝのが楽しみ』と、につと笑うたその顔が、わしや幻にちらついて、得忘れぬ」

と口説き立て、口説き立つれば初菊も、

「ほんに思へばこの身程果敢はかない者が世にあらうか。

解けて逢ふ夜のきぬぐも永き名残りの許婚いなすけ、二世

を結ぶの枕さへ、交はず間もなうこの様な、悲しい

別れをすることは、マどうした罪か情ない。私も一

緒に殺してたべ、死にたいわいな」

と身を悶え、互ひに手を取り交はし、名残り涙

の暇乞ひ、見るに目もくれ心消え、母も老母も声を

上げ、『わつ』とばかりに取り乱せば、さすが勇気の

光秀も、親の慈悲心子ゆゑの闇、輪廻の絆に締めつ

けられ、こらへかねて、はら／＼／＼、雨か涙の汐

境、浪立ち騒ぐごとくなり。